リーダー研修 in 黒谷川

[報告者]：内野繁樹
[釣行日]：令和７年６月２７日～２９日
[参加者]：寺尾一木、黒須悠輔、藤田篤、内野繁樹

今回の釣行は私にとって入会以来 2 度目のリーダーを任された釣行だった。昨年既に 2 泊 3 日の釣行のリーダーを任されていたため、今回は勝手がある程度分かっている分、いくらか気持ち的に余裕があったものの、私のような源流経験の浅い者が場合によっては命の危険もある 2 泊 3 日の源流釣行のリーダーを務めていいものだろうかという葛藤を心に抱えていた。しかしながら、任された以上はやり抜く覚悟で不安を少しでも小さくするため

事前準備は随分前から入念に行っていた。幸い、今回の沢は癒しの美溪として超がつく程有名な恋ノ岐川であり、沢登りで非常に人気の沢であるため情報収集にはさほど苦労することはなかった。そのため、釣りの時間も十分に確保でき、脱溪も比較的容易に可能と思われる、我ながらバランスの取れたルートを設定することができたと思っていた。釣行日が近づくにつれて不安感はいい意味での緊張感へと変化し、未知の美溪を思い描き胸の高鳴りを感じていた。

いよいよ前日となり、集合場所として指定した道の駅で黒須君と一足先に合流した。時刻は夜の 11 時で、少し雑談して明日も早いのでもう寝ようと話していたところで藤田君からの電話が鳴った。藤田君の到着は午前 2 時過ぎになると連絡を受けていたので、どうしたのだろうと電話に出ると、「僕の勘違いだとは思うんですど……。」何だか不安気にその先の話を続ける。「恋ノ岐川までの道が僕が見ている地図だと通行止めになってるんですけど大丈夫ですかね？」そんなの勘違いに決まっているだろう！私がリーダーを務める釣行に限ってそんなことがあるはずがない！と心の中で吐き捨てるように呟きつつ、藤田君より送ってもらった村から公式にリリースされている国道 352 号線に関する規制状況のインフォメーションを確認した。その瞬間に一気血の気が引くのが分かった。そして現在地からは恋ノ岐川には絶対に行けない状況を理解した。そもそも普段から私は只見川によく釣りに行っており、毎年国道 352 号線の全区間が開通するのは 7 月上旬であることを今更ながら思い出した。だとすると、次なる疑問はじゃあなぜ 6 月のこんな時期に会の公式釣行として恋ノ岐川が設定されたのだろうということだ。これは通行止めとなっている場合でも何とかして行ってみろ、とリーダースキルを会から試されているのだろうか？だとしたら、もうそれは一時期相撲部屋で流行していたかわいがりというものではないか？それとも、もしかしたらまだ入会して 3 年目のくせに調子に乗った発言が多くて気に入らないからここで一回思い知らせてやろうということなのか？混乱のあまり強い被害妄想に襲

戦慄が走った 6/26 時点での交通状況

われて様々なシミュレーションを頭の中で思い描いたが、直ぐに冷静さを取り戻し、単純に会の方でも国道 352 号線の開通時期を失念していただけだろうという、至極当然の結論に落ち着いた。

どうしよう。本当に困った。すると横にいた黒須君が、「じゃあ黒谷川に行きましょうよ！先々週に大貫さん、平江さん、寺尾さんで行こうとしていて、結局雨で中止になったみたいですしちょうどいいじゃないですか！」と提案してきた。何がちょうどいいのか分からないし、そんな物騒なメンバーで行こうとしていた沢なんて絶対険谷に決まっている。本来行こうとしていたのは癒しの美溪である。しかしながら、代替案もないのでどのくらいの行程か尋ねると、「距離的には 5 時間くらいですよ！」とのことだ。絶対にそんなはずない。実は先週も黒須君によるルート案内の釣行に参加したのだが、テンバまで林道 2 時間、川歩き 1 時間、合計 3 時間ちょっと言っていたのが、結局テンバまで 7 時間もかかっていた。可哀想なことに、大人になっても数の数え方がまだ分かってないのだと思う。今回も全く信用できないが、藤田君も憧れの黒谷川源流に行けると興奮していたし、他に選択肢もないので、今回は癒しの美溪への釣行から一転、全く未知で辿り着けるかも分からない黒谷川源流への釣行へと変更された。そして私の入念な下調べは完全に水泡に帰すこととなった。朝になり寺尾さんも合流し、私にとっては何の情報もない、不安しかないリーダー釣行がスタートすることとなった。

9 時間後、テンバに到着した。もう一度言う。9 時間後にテンバに到着した。流石に先週あれだけしつこく時間を見積もるときはある程度保守的にしておいた方がいいのでは？とアドバイス（というよりはむしろ強い抗議）をしていたのにも関わらずである。やはり数の数え方が本当に分からないのかもしれないと、怒りよりも哀れみの感情を覚えた。しかし、今回私はこの釣行のリーダーである。リーダーたるもの、結果に重きを置き、大義を果たすためにはメンバーの失態について目をつむるということも時には必要かもしれないと思った。そして、今回の釣行では「赦す」ということを自らのテーマとすることに切り替えた。

黒谷川源流部への行程はというと、不安が見事に的中してしまい、今までの釣行で一番ハードなものとなってしまった。延々と続く急登、猛烈な藪の中のトラバース、全く前進することのできないシャクナゲの藪漕ぎなど、ルートが確定していないという不安を抱えながらのこのような悪路を進むのは本当に精神的にも肉体的にも疲弊する。入会間も無くして参加した 2 泊 3 日の釣行も片道 11 時間というとんでもないものだったが、今回の行動時間はその時よりは短いものの、とにかく道筋が全くなく、藪の濃い上りばかりでテンバに着くまでに完全に消耗し切ってしまった。

猛烈なシャクナゲの藪。進行方向は正面松の木。今年はもう絶対こんな藪漕ぎしたくない。

休憩するスペースもほとんどない藪。

数メートル先のメンバーを確認することすら困難。

寺尾さんは相当お疲れの様だが、年齢を考えるとこのルートについて来られること自体が驚異的。

藪漕ぎ中でも元気な藤田君。

山頂付近で見つけたネマガリタケ。根本かじると想像以上に甘かった。熊の好物であることも納得。

黒須君ももちろん元気。私も笑ってはいるが実はこの時全く元気ではない。

テンバに到着してからは全く動けず、私と寺尾さんはしばらく座り込んでいることしかできなかった。こういうハードな釣行時にはテンバに着いた瞬間に帰りの行程が頭に浮かびとても憂鬱になる。寺尾さんも同じことを思っていたようだ。座り込んだまま全く動く気配のない沈んだ雰囲気の 2 人を横目に、若い体力旺盛な黒須君と藤田君は黙々とタープを張り、焚き木集めを行っていた。この時私は思った。今回のリーダー釣行において黒須君と藤田君の参加を許可したことは、リーダーとして最大のファインプレーではないか。また、一歩引いて全体を見渡すと、動けないが知識が豊富な寺尾さんと、数は数えられないが体力はある黒須君、素直で汚れ仕事でも何でも進んでこなす藤田君という理想的なパーティーを構成することに成功している。既に私はリーダーとして大きな成功を収めているのだ。だから今日はもう動かないことに決めた、と疲れ過ぎていたため自分にとって都合のいい解釈を行い 2 人があくせく労働しているのを座り込んだまま傍観していた。

余りにも動かない状況を流石にまずいと思ったのか、「ちょっとパフォーマンスでもしてくるか。」と謎の発言をして寺尾さんがおもむろに立ち上がり、薪を拾い始めた。何本か細い薪を集めて若い 2 人の元へ持っていくと、「もう薪は十分ありますよ！しかもそんな細いの別にいらないですよ！」と不機嫌そうな感じで黒須君に一蹴されていた。やはりこういう時は下手に動かない方がいいのである。中途半端なことをする方が余計に癇に障るのである。一連のやり取りを見て私はそう確信し、座り込んだ場所から一歩も動かず、引き続きそれぞれのメンバーの行動を観察することに徹した。

テンバで黙々と労働する若者を横目に全く動く気配のない寺尾さん（撮影者の私も同様）。

パフォーマンスをしだした寺尾さん。私は撮影者に徹する。

テンバに到着したのが夕方近くだったこともあり、設営が完了して少し落ち着いたらすぐに夕食とすることとした。疲れて調理をする気が起きない中、寺尾さんが持ってきたもつ次郎 1 キログラムは温めるだけで簡単で、道中で採取したウスヒラタケを投入して食べたところ、実に体に染み渡る美味しさだった。当初は癒しの美渓への釣行予定だったのだが、「黒谷川源流部への釣行と分かっていたらこんな重いもの持ってこなかったよ！」と、実際にもつ次郎を担いでいない寺尾さんが言っていたが、この時はもう「実際に担いだのは藤田君じゃないですか〜！」と突っ込む気力も残っていなかった。とりあえず、精神的にも肉体的にもかなり疲弊したもののなんとか無事に 1 日目を終えることができ、少しホッとして眠りについた。

6 月末にもかかわらず雪渓の近くにはウドが群生していた。奥只見は本当に自然が豊かだ。

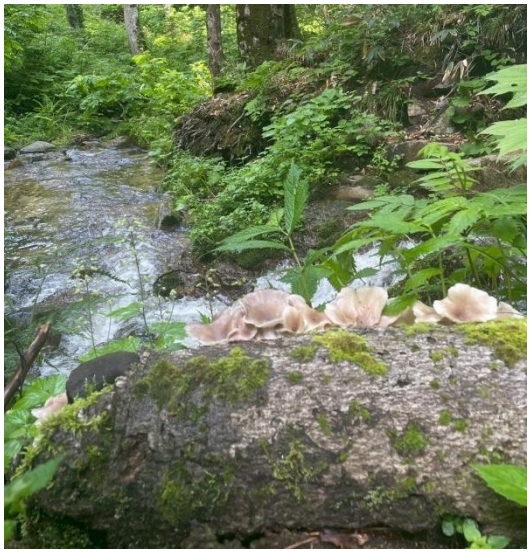
寺尾さん持参のもつ次郎 1 キログラム。衝撃的な美味しさで源流の定番メニューとなりそうだ。

明るさを感じて目を開けると、鳥の囀りで辺りは大分賑やかだった。昨日はぐずついた天気だったが、今日は気持ちの良い晴天のようだ。鳥の囀りに混じり、食器を洗う音やお湯を沸かす音が聞こえる。誰かがもう行動を開始しているようだ。体を起こすと、「おはようございます！お茶にしますか？コーヒーにしますか？」と藤田君に声をかけられた。一瞬、ここはホテルかと錯覚してしまった。なんて気が利く若者だろう。少し申し訳なく感じたものの、無意識に「じゃあコーヒーで。」とリーダーかつ年長者の立場を濫用する振舞いを取ってしまっていた。そのままの勢いであれこれ指示して口だけ動かし、若い 2 人の労働によって朝食は完成した。

朝からよく働く藤田君。私は写真を撮りながら指示を飛ばしている。

私の指示のもとに完成した朝ご飯。

朝食を済ませるといよいよ源流釣りである。さあ出発するか、という時にふと違和感を覚えた。源流なのにアロハシャツを着ている者がいる。しかも 2 人、そしてお揃いの柄を着ているのだ。全く意図が分からないが、寺尾さんが黒須君の分もわざわざ買ってきたとのことだ。おそらく日本中どこを探してもアロハシャツで源流釣りをする者などいないだろうが、今回のパーティーはアロハシャツの着用率が 50%である。余りにも開放的な姿に私も次回はアロハシャツにしようかな、という思いが一瞬浮かんだが、やはりアロハシャツ以前にそもそも源流で半袖はないだろうと思い不採用とした。



ウスヒラタケ。

ウスヒラタケに群がる人間達。

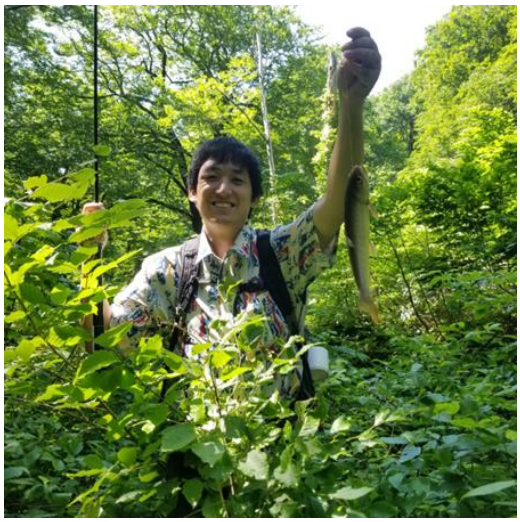
ヒラタケ。

ヒラタケに群がるアロハシャツ。

肝心の釣りはというと、時間が早かったせいなのかは分からないが、最初の 2 時間くらいは思ったほどの釣果でなかったものの、しばらくするとまさに一投一匹のような感じとなった。さすがに尺越えはなかなか出ないが、魚影は濃く、状態の良い綺麗な岩魚が次々に竿を曲げてくれる。私の釣法はフライフィッシングだが、過去には釣果にこだわるばかりにニンフで釣っている時期がしばらくあった。しかし、やはりフライフィッシングの醍醐味はドライフライだと思い出させてくれるほど面白いようにドライフライに反応してくれる魚ばかりで幸せな時間を過ごすことができた。

意外なほどに華麗な竿捌きだった寺尾さん。

良い型を釣り上げ嬉しそうな私。



こちらも良い型を釣り上げて嬉しそうな黒須君。蚋に刺され顔が腫れている。

餌が無くなり、餌竿に毛バリをつけた提灯釣りの指導を寺尾さんから受ける藤田君。

6 月末だとまだまだ雪渓が残る豪雪地帯。

雪渓の周りには極上ウド、蕗の薹が群生。

昼食は源流蕎麦。夏の源流の風物詩。

何故か蕎麦にそうめんまで混ぜてしまった寺尾さん。

期待以上の釣果ということもあり、夕食は岩魚づくしとなった。岩魚の刺身、岩魚の握り寿司、なめろう、フライなど、久しぶりに源流で食べる岩魚料理は本当に美味しかった。また、釣行中に採取したヒラタケを使って寺尾さんが作ったクリームパスタは衝撃的な美味しさだった。良い釣りができ、美味しい料理も食べられて皆上機嫌だったが、明日は下山でまた過酷な一日になることが予想されるため、朝食の準備も済ました上で早めに就寝することとした。

握る姿が様になっている寺尾さん。

源流でしか食べることができない岩魚の握り寿司。個人的には岩魚の刺身の美味しさは海の魚を含めても上位に来ると思う。

朝になり目を覚まし体を起こすと「おはようございます。お茶にしますか？コーヒーにしますか？」と藤田君に声をかけられた。もう私がリーダーの釣行には藤田君は必ず参加してほしい。いや、藤田君の参加を私がリーダーを引き受ける条件とすることとしよう。

朝食の準備をしていたところ、私としたことがうっかりフリーズドライの味噌汁の数を間違えて持ってきてしまい、3 日目の朝の分が 2 つしか残っていなかったことに気づいた。そこで、私はリーダーとして若者 2 人の今回の貢献には特別に報いてあげなければならないだろうと考え、源流では大変貴重な残りの味噌汁を彼らに報酬として与えることとした。これは特別な報酬として与えるものである旨伝えて渡した時、黒須君の顔が少し強張っていた。

朝食を済ませ、撤収準備を始めてザックの中の荷物の整理をしていたところ、持参してきた米 2 号が余っていることに気づいた。帰りの行程を考えると少しでも荷物は軽い方がいいので燃やして行こうと思ったが、今は空前の米不足であり、街に戻っても米は大変貴重なものとなっている。これも報酬として与えてしまえば一石二鳥ではないか。近くにいた黒須君に追加報酬を与える旨を伝えて米を手渡した。顔を強張らせながら、「報酬ならもっとマシなものがいいのになぁ……。」と呟いていたが、聞こえないふりをした。整理を進めていくと、最後にガス缶が丸々一本余っていたことがわかり、先程の呟きを聞いていたので流石にこんな重いものを報酬として渡したら怒るかなと思ったが、恐る恐る「臨時ボーナスです。」と言って渡したら、「こういう報酬が欲しかったんですよ！」と大喜びしていた。予想外の反応に今度は私の顔が強張った。

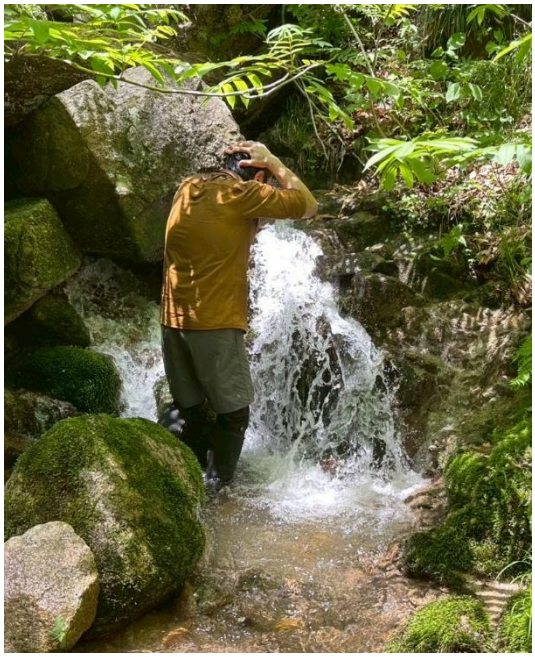
今日も朝から実によく働く藤田君。

とりあえず残った食材を全部入れた炒飯。
普通に美味しかった。

撤収が完了し、ちょうど 7 時にテンバを出発した。今日も良く晴れて気持ちの良い天気だが、その分暑さによる熱中症リスクに不安を感じつつ黙々と歩みを進めた。予想は的中し、高い気温の中でひたすら藪を漕いでいると暑さで朦朧としてしまった。少し休憩をしていると、かなり下の方から沢の音が聞こえてきた。「暑いから沢沿いに帰りましょうよ！」と黒須君が駄々を捏ね出す。寺尾さんは、「滝が出てきたらどうする？来た道を帰るのが確実

だ。」という。まあそれもそうだよね、と聞いていると、「リーダーが決めてください！」と直球のボールを投げ込まれた。正直よく分からないんですけど、という感じだったが本気で私に判断を委ねているようだ。ご存じの通り、私はこういうことを初めてまだ日が浅いんですけど、正気なんですか？と思ったが、そんな話をしたところで事態は前に進まなそうな空気を読み取り、仕方なく決断することとした。私は保守的な人間なので、藪が濃くて大変だが、やはり来た道を帰れば迷うことなく確実に下山できるため、寺尾さんの案を採用することとした。そしていきなり駄々を捏ね出した黒須君を赦すこととした。

帰りの尾根道から遠くに見えた燧ケ岳（多分。）。



きつい行程が終了した場所にある小滝で一休み。

この日は快晴で気温が高く水浴びが本当に気持ち良かった。

文字通り生き返った表情の寺尾さん。

結局、帰りは行きにあったような迷う時間がなかったことと、下りの距離が長かったこともあり、6時間半程度で下山することができた。車に到着し、それぞれのメンバーと固い握手を交わした瞬間、安堵感からどっと疲れが出るのを感じたが、同時にきつい釣行をやり遂げた心地の良い達成感も感じることができた。

今回は私の確認不足で当日に目的地が変更となってしまいましたが、寺尾さん、黒須君がルートを把握してくれていたおかげで難関の黒谷川源流になんとか無事到達することができ、とても感謝しています。寺尾さんは山菜、キノコ、狩猟などに造詣が深く、話を聞いていてとても勉強になり楽しかったです。あと、一見豪放磊落で自分のやりたいようにやっているように見えて意外に周りに気を配っているというのが今回の釣行を通じて良く分かりました。黒須君は数字に難はありますが、源流ではいつも通り設営、薪拾い、水汲みなどの力仕事からルートのアドバイスまで、常にサポートしてくれて本当に頼りになります。藤田君は次回以降私がリーダーを務める釣行には必ず参加をお願いします。

今回の釣行も最高でした！皆さん、また是非ご一緒させてください！